



果たして、あいつは本当に来るのか。

今日も、美里はクレッセンドホテルのロビーの椅子に座っていた。椅子は布製で、白を基調とし、ところどころに縦じまのラインがある。すぐ側には受付とカフェがあり、美里は座ったままで両方とも眺めることができる。逆に言えば、受付からもカフェからも美里が座っている場所は見える。囿になるにはもってこいの場所だ。

待合室はみっちり座って二十人ぐらいか、そこには、大きなカバンを持った人や、受付でチェックインやチェックアウトをする人などが待っており、時間が経過するとともに人は絶えず入れ替わっていた。その主のようにずっといるのは美里だけだった。

だから、美里は他のお客さんに怪しまれないように、受付の方に行ったり、トイレに行ったり、時には、用もないのに、三階の宴会場や最上階のレストランに足を運んでは、待合室に舞い戻り、今来たようなお客の素振りをした。

もちろん、美里にも区別がつかないけれど、ホテルの受付にも、カフェのウェイトレスにも、ポーターやボーイの中にも、黒服が命令した情報機関のロボットたちが、さりげなく美里の動きを監視している。はずだ。

見張られていることで、安心感はあるものの、ロボットたちは、美里の行動を全て目のカメラで記録しているから、恥ずかしいこともある。例えば、鼻水を出したりとか、くしゃみをしたりとか、あくびを噛み殺したりした顔とか、全ての行動が、しかも、あらゆる方向から記録されているし、その映像は黒服たちに放映されている。

どこかの場所から、黒服や支配人が美里の行動を監視していると思うとあまりぞっとしないし、恥ずかしい。もちろん、黒服も支配人も美里の行動に関心があるわけではなく、あいつが映っていないか、近づいていないか、を確認するためだ。

このまま、あいつが来ない方がいい。そんな思いがあった。こうして、ホテルの中を散策するだけで、お金はでる。その出し方が、情報機関の黒服からなのか、支配人からなのかはわからない。どちらでもいいことだ。お金に黒色も白色も色は付いていない。美里には子どもたちを育てる資金が必要なだけだ。もちろん、それは、美里の体が無事だという保険の元でだが。

喉が渴いた。黒いバッグからペットボトルを取り出す。キャップを開け、喉を潤す。顔を上げ

たことで、二階の椅子に座っている男の頭が見えた。この待合室があるロビーは二階まで吹き抜けだった。

そうか。二階にも待合用の椅子があったんだ。もしかしたら。

美里はペットボトルの蓋を急いで締め、バッグに忍ばせると、近くのらせん階段を登り二階へと向かう。二階には中華、和食などのレストランがある。その店舗の前に、二つのテーブルと一つのテーブルにそれぞれ四脚の椅子が並べられていた。そのうちの一つの椅子に下から見えた男が座っていた。

美里はその男が座っているテーブルとは違うテーブルの椅子に座った。美里が座ったテーブルには、年の頃なら三十代前半か、白いブラウスに青いスカートを履いた女性が座っていた。椅子と自分の体の隙間に黒いバッグを置いている。女性はスマホを左手で持ち、右手の人さし指で画面を動かしている。

女性の雰囲気からすると、美里と同じ匂いがする。ハートケア士か。ここに座っていることから、約束の時間に早く来過ぎたためにまで時間をつぶしているのだろう。仕事仲間に気を掛けるよりも、今は男だ。男の正体を掴みたい。

美里は男の横顔が見える椅子に座り直した。左隣りには、ハートケア士の女性。男の顔を見つめる。男は酔っているのか、顔が赤い。それに目がうつろだ。中華か、和食の店のランチで、昼間からアルコールを飲んだのだろう。酔いを醒ますために椅子に座って休んでいるのか。

その様子から推測するとあいつではないと思われる。アルコールが入れば、判断力が鈍る。すぐに、化けの皮が剥がれたり、尻尾を見せることになるはずだ。そんな危険なことをあいつがするはずがない。じゃあ、目の前の男はあいつじゃないのか。いや、こちらを安心させるために、あえて、酔ったふりをしているだけなのかもしれない。もう少し、様子を見ないと、見極めないとわからない。

その時、右隣に座っていた女性が立ちあがった。約束の時間が来たのか。同じ仕事をしている仲間として、大変だろうが頑張っただけで欲しい。心の中でエールを送る。

「あら、ごめんなさい」

女性が美里の方に突然倒れてきた。脚でももつれたのか。女性の指が美里の指に触れる。美里は女性の顔を見た。ちひろさんだ。ちひろさんが隣に座っていたのか。いや、違う。ちひろさんは黒服や支配人と一緒にあたしを監視しているはずだ。あいつが現れたならば、このホテルに来

る手はずになっている。じゃあ、他人の空似なのか。それにしてもよく似ている。

いや、よく似ているじゃない。本物のちひろさんだ。あたしの記憶の中でのちひろさんだ。ということは、あいつは女性にも化けられるんだ。

危ない。このままでは・・・。

美里は女から逃れようと隣の椅子に向って咄嗟に倒れこんだ。女の指が離れた。

痛い。体中に痛みが走る。美里の意識はちひろさんから自分の痛みが変わる。

「大丈夫ですか？」

隣の、少し酔った男性が手を差し伸べてくれた。

「大丈夫です」

美里は自力で立ち上がろうとする。男性の指が美里の指に触れた。

「あっ」

美里が顔を上げた。そこには、白い服を着た支配人がいた。まさか、いや、なぜ、支配人がここにいるのだ。あいつを捕まえにもうここに来たのか。

椅子に座っている支配人。美里の横に立つちひろさん。美里には何が何やらわからなくなった。支配人は、ハートケア士の会社を経営しており、以前は、情報機関に。ちひろさんは、今は美里と同じハートケア士だが、以前は、戦闘員として戦場で戦っていた。分かっていることなのに、知っていることなのに、記憶が無理やり吸い出されるように浮かび上がってくる。

そして、美里は真っ暗な部屋にいることに気付いた。部屋の中には、黒服がソファに座っていた。黒服もいるのか。これで、三人揃い踏みだ。黒服も助けに来てくれたのだ。いや、違う。美里はホテルの二階のソファにいたはずなのに、いつ、部屋に入ったのだ。ここは、黒服と初めて会った面接の部屋ではないか。

美里は気付いた。そうだ。この男も、あいつなのだ。あいつは、あいつたちだったのだ。あいつは一人ではなく、複数だったのだ。もうだめだ。あたしは、あいつたちに取り囲まれた。

その時、美里の名前を呼ぶ声がある。

「美里さん」

「美里」

聞き覚えのある声。本物のちひろさんと支配人の声だ。

「ちっ。邪魔が入った」

「ちっ」

悔しそうな舌打ちがある。

「いくぞ」

「いいわ」

記憶の中の支配人とちひろさんの声だ。

「待て。逃がさないぞ」

現実の黒服の声がした。床に倒れたままの美里からは、男と女、支配人、ちひろさん、黒服、そして、ボーイなどの警備ロボットが数体見えた。男と女は取り囲まれた。形勢はさっきと逆転だ。男と女は手を繋いだ。捕まることを観念したのか。いや、違う。

「伏せろ」

黒服の怒声。その瞬間、爆発音。二体の人間が、いや、ロボットが爆発した。自爆だ。もちろん、ロボットの意思ではない。このロボットたちを操る何者かの仕業なのだろう。

「大丈夫か」

黒服が美里を抱え起こす。うつぶせになった美里が顔を上げた。美里は抱え起こしてくれたのが本物の黒服であることを知る。もう一度、黒服の顔を見る。

黒服にも人間の心があったんだ。すると、偽物か？

黒服は爆発した二体のロボットの残骸を見つめている。黒服が顎を上げた。黒服の部下のボーイ姿のロボットたちが残骸を集め始めた。

「貸してみろ」

黒服が部下のロボットが集めた残骸の一部を手を取った。

「それで、何かがわかるの」

美里はようやく自らの足で立った。

「わかるものか、わからないようにするため、自爆させたんだ」

半ば自嘲気味に黒服が吐き捨てた。